



**Data**

監督：チャン・フン  
 脚本：パク・サンヨン  
 出演：シン・ハギョン/コ・ス/イ・ジェフン/リュ・スンス/コ・チャンソク/イ・デビッド/チョ・ジヌン/チョン・インギ/パク・ヨンソ/リュ・スリョン/キム・オクビン

## 👁️👁️ みどころ

『ブラザーフード』（04年）、『戦火の中へ』（10年）に続く朝鮮戦争をテーマとした名作の誕生！2年以上続く停戦協議中の凄惨な「高地戦」に焦点をあてたところがミソ。旅順203高地は一度占領すればすべてケリがついたが、エロック高地では？

消費増税法案に「景気条項」がついたのと同じように、1953年7月27日午前10時に成立した停戦協定には、発効を午後10時と定める第5条附則63項が！しかし、歴史から消された12時間の戦いとは？

『戦線夜曲』のものの哀しいメロディに耳を傾けながら、この名作をじっくりと。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■朝鮮戦争の停戦協議中の東部陣戦線に光を！■

多くの日本人にとって「朝鮮戦争」は対岸の火事であるうえ、日本経済にとっては「朝鮮戦争特需」を生み出してくれたありがたいものという受け止め方が多い。しかし、朝鮮半島の人々にとっては、日本の敗戦によってやっと朝鮮半島から日本の軍隊がいなくなったのに、今度は同じ民族が朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）と大韓民国（韓国）に分かれて戦わなければならなくなったのは大きな悲劇。朝鮮戦争を描いた韓国映画には、既に『ブラザーフード』（04年）（『シネマルーム4』207頁参照）や『戦火の中へ』（10年）（『シネマルーム26』104頁参照）などの名作があるが、そこに新たな名作が登場！

朝鮮戦争は1950年6月25日に始まり1953年7月27日に終わったが、戦争についての記録はどれも「1951年1月4日韓国軍後退、停戦協定へ」で締めくくられているらしい。しかし現在でも、シリアで続けられている停戦協議の最中に次々と戦場が起

こり死者の数が増大しているのと同じように、東部戦線では停戦協議が難航した2年余の期間も激しい戦闘が続いていたらしい。本作はキム・ギドク監督の教え子であるチャン・フン監督が、『映画は映画だ』（08年）（『シネマルーム22』237頁参照）『義兄弟』（10年）に続く第3作として取り組んだ戦争大作だが、朝鮮戦争のそんな局面にスポットライトをあてたところがミソ。さあ、朝鮮戦争のハンバーガー・ヒルでは、一体誰がどんな死闘を？

## ■奪い奪われる「高地戦」がなぜ数十回も？■

本作の英題は『THE FRONT LINE』だが、これよりは邦題の『高地戦』の方が日本人にはわかりやすいうえ、本作のテーマにも合致している。本作が設定するエロック高地は架空のものだが、南北境界線にあるこの高地は停戦協定が成立・発効した時点でどちらが占領していたかによって北か南かのどちらの領土に属するかが決定するから、とにかく占領しておくことが大切。そのため、停戦協定が今日成立するか、明日成立するかと期待しながら、韓国軍と人民軍が互いに奪い奪われの死闘をくり返していたわけだ。ところが、停戦協定が2年以上まとまらないため、今日奪われたら、明日は奪う攻防は既に数十回にもなっていた、というから驚きだ。

日露戦争において日本軍が犠牲を積み重ねた旅順203高地の攻防戦では、一度日本軍がこれを制圧占領すれば一気にすべてのことが解決したが、エロック高地ではそうはいかなかったらしい。しかし、いかに領土問題に影響するとはいえ、こんなちっぽけな(?)エロック高地を死体の山にするほど、その奪い奪われの攻防戦に価値があるの？戦うのは仕方がないが、停戦協定は一体いつ成立するの？2年余もそう思いながら戦っている双方の兵士たちは、もういい加減ウンザリ・・・。

## ■ストーリー展開その1、1953年冬■

映画は1953年の冬、すなわち停戦協定が成立する53年7月27日の約半年前から始まる。その舞台はエロック高地ではなく、流行歌『戦線夜曲』が流れる韓国の首都ソウルだ。つまりチャン・フン監督は、まずアメリカ、北朝鮮、中国の3者が南北境界の線引きをめぐる火花を散らし、容易に解決の糸口を見つけない停戦協議の様子から描いていき、その中で本作の主人公となる韓国軍防諜隊中尉カン・ウンピョ（シン・ハギョン）の人間性をあぶり出していくわけだ。

ここで露骨に軍の方針に異を唱えたウンピョは、上層部の命令によって停戦協議中も激戦を重ねている東部戦線へ赴いてのある調査を命じられることになるわけだが、そこで彼を待ち受ける運命とは？

## ■ストーリー展開その2、開戦直後の1950年6月末■

スクリーンはそこから一転、場面は開戦直後の1950年6月末にさかのぼる。この時小隊長として人民軍と戦っていたウンピョは人民軍から猛攻されあつという間に捕らえら

れてしまったが、この時人民軍を率いていたヒョン・ジョンユン隊長（リュ・スンリョン）は「お前らが逃げ惑うのは、理由を知らずに戦うからだ。この戦争は1週間で終わる。おとなしく故郷に隠れて終戦後に祖国の再建に努めろ」と言い放ってウンピョたちを釈放した。

ただし、1人負傷した当時二等兵だったキム・スヒョク（コ・ス）だけは傷の手当のため人民軍に連行されていくことに。

### ■ストーリー展開その3、再び1953年冬■

続いて場面は再び1953年冬に移る。ウンピョがエロック高地のワニ中隊に赴任してみると、そこには何と今は中尉となったスヒョクが！これは一体なぜ？もともと、ワニ中隊の臨時中隊長はまだ20歳になったばかりの青年大尉シン・イリョン（イ・ジェフン）だが、なぜかモルヒネを打ち続けている彼にはいわく因縁がありそうだ。

ウンピョと共に赴任したのは新しい中隊長ユ・ジェホ（チョ・ジヌン）と17歳の新兵ナム・ソンシク二等兵（イ・デビッド）だが、無能な中隊長が中隊を率いとロクなことにならないことは目に見えている。しかも、防諜隊中尉のウンピョが聞いていた情報では、戦死とされていた前任の中隊長の死体からは味方の銃弾が発見されたらしいから、物騒、物騒。そのうえ、防諜隊中尉たるウンピョが与えられた任務はワニ中隊の中にいるはずの人民軍への内通者を調べて報告せよということ。今こうして再会を喜んでいるスヒョクたちの中に、まさか・・・？



『高地戦』

11月3日（土）シネマート心斎橋、11月24日（土）元町映画館、近日 京都みなみ会館にてロードショー！  
配給：ツイン ©2011 SHOWBOX/MEDIAFLEX AND TPS COMPANY ALL RIGHTS RESERVED.

## ■□■この展開、この演出はお見事！■□■

チャン・フン監督が本作の導入部でみせるこんな展開、こんな演出はお見事！なぜなら観客はチャン・フン監督が次々と展開していくストーリーに興味をひきつけられ、目をひきつけられていくことになるからだ。そして、その後にみせる第1回目の高地戦、『プライベート・ライアン』（98年）『硫黄島からの手紙』（06年）（『シネマルーム12』21頁参照）『戦場のレクイエム（集結号）』（07年）（『シネマルーム22』218頁参照）『戦火のナー ज्या』（10年）（『シネマルーム26』110頁参照）などはそれぞれその戦闘シーンがすごかったが、100億ウォンの製作費を投入した本作の高地戦もすごい。

チャン・フン監督が導入部でみせるそんな演出の見事さに感心しつつ、高地戦の大スペクタクルをタップリと！

## ■□■2人の主人公をはじめとする各キャラに注目！その1■□■

大映のヒットシリーズとなった『悪名』シリーズは勝新太郎と田宮二郎コンビ、『兵隊やくざ』シリーズは勝新太郎と田村高廣コンビのキャラが際立っていたが、本作ではまず全編を通じて物語をリードする主人公ウンピョのキャラに注目！

そして次に、ウンピョより出番が少ないけれどもある意味ではウンピョ以上に個性の強さが際立つスヒョクのキャラに注目！スヒョクは50年6月末の戦いでウンピョの小隊に属していた時は二等兵だったが、53年冬にウンピョがワニ中隊に赴任した時はわずか2年間で中尉に昇進するとともに中隊の実質的リーダーになっていた。しかして、それは一体なぜ？中隊長戦死の疑問や人民軍との内通問題はストーリーの展開につれて少しずつ明かされていくが、その中で見るスヒョクのキャラは興味深い。また、本作では17歳の新兵ソンシクが『戦線夜曲』を美声で歌い聴かせる若き兵士として描かれるが、彼が人民軍の狙撃兵「2秒」から撃たれる時のストーリーは興味深いから、それに注目！

## ■□■2人の主人公をはじめとする各キャラに注目！その2■□■

次に前述の、いわく因縁のありそうなイリョン大尉やバカさ加減が際立つジェホ中隊長、そして日帝時代に満州からの独立運動をしていたという北朝鮮出身のベテラン兵士ヤン・ヒョサム曹長（コ・チャンソク）や酒を愛しいつも中隊を盛り上げるムードメーカーであるオ・ギヨン軍曹（リュ・スンズ）など、ワニ中隊の連中はみんな個性豊かだ。奪い奪われをくり返す高地戦の頂上の砦の中で再三催される酒盛りには、ウンピョも「なぜこんな所に酒が？」とビックリ。しかし、その真相が明されると、戦争は所詮人間がやることという「人間ドラマ」が語られるとともに、いつしかウンピョもその一員になってしまうところが面白い。

さらに特筆すべきは、本作の紅一点として登場する人民軍の狙撃手チャ・テギョン（キム・オクビン）と人民軍中隊長ジョンユンのキャラ。エーリッヒ・マリア・レマルクが描いた『西部戦線異状なし』はドイツ軍とフランス軍との戦いだったが、朝鮮戦争は同じ民

族同士の戦争だから、今は敵同士であっても時代が変われば結婚相手になる可能性だってあるもの。したがって、本作におけるテギョンの登場は単なる優秀な狙撃手以上の役割を担うことになるから、そこに注目！また、『戦火の中へ』では北朝鮮軍の司令官に扮したチャ・スンウォンが圧倒的な存在感を示していたが、本作でもリュ・スンリョンが圧倒的な存在感を発揮している。

私が本作に星5つを与えたのは、映画製作の着眼点やストーリーの骨太さに加えて、ウンピョ、スヒョク2人の主人公をはじめとする各登場人物のキャラの強さに圧倒されたためだ。

## ■後半の3つのストーリーに注目！■

本作中盤の見どころはまさに「高地戦」だが、「後半の見どころ」は3つある。第1は「2秒」と称される狙撃兵をめぐる物語。なぜ「2秒」と称されるのかは、撃たれた兵士が倒れてから2秒後に銃声が聞こえるため。つまり、680メートル先から正確に狙撃されているわけだが、その「2秒」をめぐる攻防はいかに・・・？第2は「2秒」によって狙撃されたソンシク二等兵を見殺しにしたとなじるウンピョに対して、スヒョクが「お前は地獄を知らないんだ」と一蹴し、隊員たちも口をつぐむ「浦項の地獄」の物語。1950年6月25日に始まった朝鮮戦争は当初人民軍の南下のスピードが早く、8月には洛東江を突破して国連軍と韓国軍を釜山まで追い詰めた。そんな中、『戦火の中へ』で描かれた浦項女子中学での戦闘が起きたわけだが、本作でスヒョクがいう「浦項の地獄」とはある意味でそれ以上の悲惨なもの。そこでは精神異常をきたす兵士まで出るありさまだったが、その実態はあなた自身の目でしっかりと。

そして第3は、1950年10月18日の中国の参戦に伴う中共軍（中国人民解放軍）の侵攻。1950年9月のマッカーサーによる仁川上陸によって国連軍は一気に形勢を逆転し、ソウルを奪還、北上を始めたが、さて中国が参戦してくると・・・？「持ち場を死守せよ！」は、玉砕に玉砕を重ねた旧日本陸軍の悪しき伝統。私はそう思っていたが、圧倒的な中共軍が展開してくる前で、本部からの「死守せよ」の命令をくり返すジェホ中隊長を見ていると、韓国軍もやはりそうだったかと思ったが、その時ウンピョの目の前で起きたあっと驚く出来事とは？本作が後半にみせてくれるこの3つのストーリーはいずれも圧倒的な面白さがあるので、それは是非あなた自身の目で。

## ■官僚作成の文章は隅から隅まで読まなければ・・・■

野田総理が自公の党首と3者会談をしたことによって消費増税法案が成立したが、そこには努力目標として名目3%、実質2%という経済成長率が明記され、経済の急変時には増税を見送るという「景気条項」があるから、ひょっとして・・・？日本のポツダム宣言受諾は1945年8月14日午後11時、そして天皇の玉音放送（つまり政府によるポツダム宣言の受諾と戦争の終結の国民への発表）は8月15日正午だが各地で現実に関戦を停止したのは？それに対して、朝鮮戦争においては歴史的事実として南北の停戦協定が成立したのは1953年7月27日午前10時。戦場にそのラジオ放送が流れると、専らそ

の成立を2年以上待っていた将兵たちは南北を問わず大喜び。そんな様子が本作でも描かれる。すなわち、それまで敵としてエロック高地を奪い奪われし、殺し殺されていたウンピョ、スヒョクたちが川で水浴しているところで、ジョンユン隊長や「2秒」たちが出くわすシーンが登場するが、そこにみる双方の笑顔は最高のものだ。

しかし消費増税法案と同じように、官僚のつくる文章は隅から隅まで読まなければ・・・。

## ■歴史から消された12時間の戦いとは？■

たしかに停戦協定は午前10時に成立したが、そこには第5条附則63項があり、協定の実効はその日の午後10時からと定められていたから大変。すなわち、効力が発生する午後10時にエロック高地をどちらが占領しているかによってエロック高地が北の領土になるか韓国の領土になるかが決まるから、お偉方が下した命令は双方とも「午後10時までエロック高地を占領せよ」ということだ。折角パンツとTシャツ姿になってくつろいでいたのに、また軍服を着て、銃を持って戦えとはいかにも非情な命令だが、軍人がそれを拒否できないのは当然。

幸いなことにエポック高地を挟んで向かい合う人民軍と韓国軍の間は今濃い霧で覆われていた。この霧が晴れなければ、米軍の飛行機によるエポック高地への爆撃とその直後の進攻はありえないからラッキー。そんな中で聴こえてきたのが、北朝鮮兵が歌う『戦線夜曲』。それにこえるかのようにウンピョたちの中隊からも『戦線夜曲』を歌い始めたが、何とこの間に霧が晴れてきたから最悪だ。命令一下、ウンピョやスヒョクたちはエポック高地を目指して進攻を開始したが・・・。この展開には思わず涙が。俺たちは一体何の因果で、ここで再び12時間だけの戦いを・・・？ 2012(平成24)年9月7日記

### 日本でも本格的戦争映画を！

1)今なお38度線を挟んで北朝鮮と対峙する韓国では、日本のおばさまが大好きな韓流ラブストーリーの他、『シュリ』『ブラザーフッド』『SILMIDO』等々、戦争映画の名作も多い。近時の『戦火の中へ』『マイウェイ 12,000キロの真実』も戦争大作だった。中国でも辛亥革命100周年の2011年には『孫文の義士団(十月圍城)』と『1911』が公開。『戦場のレイクエム(集結號)』も強烈な戦争映画だった。

2)これに対し日本では2011年公開の『聯合艦隊司令長官 山本五十六』が

05年の『男たちの大和』に並ぶ、久しぶりの本格的戦争大作。この他にも『ローレライ』『出口のない海』『真夏のオリオン』という3本の潜水艦映画が公開され、『亡国のイージス』も良かったが、全体としては数が少なく、かつ迫力不足の感否めない。

3)尖閣諸島をめぐる日中の軍事衝突の可能性までさやかれている今、日米安保条約を基軸とした日本の安全保障体制を真剣に考えるためにも、日本でも本格的戦争映画を！

2012(平成24)年11月1日記